サビエルと山口

サビエルは四十六歳でこの世を去った。高齢社会の今なら若死である。にもかかわらず残した足跡はすごいものがある。

サビエルが日本に滞在したのは、わずか二年三カ月である。そのうちの五カ月を山口で過ごした。

極めて短いが、この五カ月間の山口はサビエルにとって特別のものであったらしい。

戦後になって日本に来た神父から、アマングチ（山口）は私たちのあこがれの地だったという話を何度か聞いた。

サビエルは一五五二年一月二十九日付で、インドのコーチンからヨーロッパのイエズス会員に山口のついて次のような書簡を送っている。

「このアマングチで二カ月が過ぎ、さまざまな質問ののち五百人前後の人が洗礼を受け、今も神の恩恵によって日々洗礼を受けています。大勢の人たちが、ボンズやその宗派の欺まんを私たちに知らせてくれました。信者になった人たちは非常に深い愛情をもって私たちに接してくれます。

彼らこそ真実な意味でキリスト信者であると信じて下さい」

ボンズとは坊主、僧りょのことである。

西の京と言われた山口、大内義隆から布教の許可を得て、大道寺という館まで与えられて布教に努めた。当時、最もにぎやかだった大殿大路の地名は今も残っている。

そのすぐ近くの大殿小学校は私の母校である。現在の大殿小学校の裏門に面して大殿大路がある。

暑い夏の午後、一人で頭の中に大内時代を描きながら、大殿大路を何度も往復した。

郊外に大型店ができて、商店街がシャッター通りになったのと同じように今の大殿大路は私の小学校時代よりもさらに寂しい通りとなり、大内時代の面影はない。

ふと、サビエルが大殿大路の井戸の横で辻説法をしたという話を思い出した。

この井戸の横でサビエルは辻説法したという

水まきをしている老人に尋ねると、その話をよくご存知で、今は吉村さんの私有地の中にあると言われた。

吉村さん宅を訪ねると、おばあちゃんが玄関から十メートルばかり奥にある井戸を見せてくれた。そして、以前はよく人が尋ねて来たが、今はそんな人もほとんどいない。それよりも改築の際、今の井戸の二、三メートル奥に古い井戸が見つかり、こちらの方がサビエルの時代の井戸に違いないと思い、すぐ市に連絡した。しかし、全く関心を示さず「埋められて結構」という返事だったという。

吉村のおばあちゃんは腹立たしげに「本当に埋めていいのですね」と確認して電話を切ったと言われた。

本物かどうかは別として、歴史を大切にするという姿勢が感じられない。その話を聞いた私まで腹が立った。

「大殿小学校の卒業生です」と言うと大変喜ばれ、しばらく話がはずんだ。今も井戸水は洗濯にだけ使っているという。

お礼を言って別れ、大殿大路に面した大内義隆の菩提寺、龍福寺を訪ねた。

こちらも人影はなく、栄枯盛衰、人の世のはかなさを痛感する。

そして、サビエルよりも二十年も長く生きている自分に自問しながら大殿大路をあとにした。

（山口放送元取締役ラジオ局長）

人影もない大殿大路